

飛騨圏域における看護職人材の確保に向けた

看護・医療職を志向する高校生に対する進路指導の現状

臼田 成之(岐阜協立大学看護学部)

松原 薫(岐阜協立大学看護学部)

キーワード：飛騨圏域，看護職，高校生，進路指導，地元愛

I. はじめに

わが国の総人口は2008年をピークに減少へ転じ、総人口に占める65歳以上の割合は2020年に28.6%、2070年には38.7%まで増加する見込である¹⁾。高齢者の増加に伴い、医療・介護のニーズは高まり、医療・看護・介護サービスの利用が増えることが予想されている。一方で、生産年齢人口(15~64歳人口)は、2020年の7,509万人から2070年には4,535万人まで減少すること²⁾、2040年には96万人の医療・福祉就業者の不足が見込まれている³⁾。加えて、看護師国家試験の受験者数の推移においては、2021年(第110回看護師国家試験)をピークにこの5年は微減しており⁴⁾、今後、看護・医療等の人材確保は喫緊の最重要課題となる。

そのなかで、岐阜県北部に広大な面積を有する飛騨圏域は、近隣および都市部の病院等への交通アクセスが十分でないうえ、医療関係者の人材不足が顕著であり、人口減少により患者数が減少し続けることでますます医療機関を取り巻く環境が厳しくなることが見込まれている⁵⁾。そのうえで2025年には、飛騨地域3市1村や岐阜県等により「飛騨圏域地域医療協議会」を立ち上げ、住民の医療アクセスや医療人材の確保などについて協議している⁶⁾。実際に医療関係者の人材確保対策として、飛騨市はU・Iターン就職奨励金や家賃補助制度、資格取得支援などの個人向け支援や夜勤手当の市独自補助等により離職率低下の実績を生み出している⁷⁾。また、医療職を目指す飛騨圏域の高校生を対象に、地域医療に対する情報提供、将来の医療人材の育成・確保につなげる目的で、高山市が主催する「メディカルハイスクール事業」⁸⁾が行われるなど、医療人材の確保に向けてさまざまな取組みをしている。その状況下において、高山市は2023年に飛騨地域の高校及び特別支援学校高等部に通う高山市在住2年生699人を対象に「高校生まちづくりアンケート調査」⁹⁾を実施している。回答者の91.3%が高山市に愛着を感じ、84.5%が高山市に誇りを感じる仕事があると回答したのに対し、高山市で働きたい仕事があると回答した者は42.4%に留まり、加えて高校卒業後に高山市外に進学を希望し市内への就職希望者は19.0%であった。この結果より、高山市内の就労定着の課題が明らかであることが示され、飛騨圏域の高校生が看護師養成校を卒業した後に地元の医療機関等に就労できるかが大きく問われる。また、ベネッセ教育総合研究所の調査¹⁰⁾によると、進路に関わらず半数以上の高校3年生が就きたい職業や自分の適正に悩み、さらに進路決定に影響した人として、進学する高校3年生は「母親」と「高校の先生」、就職する高校3年生は「高校の先生」の影響が大きいことを明らかにした。この結果から、高等学校の教員が高校生に対する看護職への進路選択や飛騨圏域の就業選択に強い影響力を及ぼしていると推察される。

このような状況のなかで、岐阜協立大学看護学部ではこれまで、高山市における地域医療・福祉の取組

みと課題の周知を目指した教育研修を実施した¹¹⁾。そこで、本調査では、飛騨圏域にある高等学校の進路指導の担当歴のある教員を対象に、看護職を志向する高校生への地元愛を育む進路指導の実態と飛騨圏域の看護・医療の現状についての認識を明らかにすることとした。

II. 目的

飛騨圏域における高等学校の進路指導の担当歴がある教員を対象に看護職を志向する高校生への地元愛を育む進路指導の実態と飛騨圏域の看護・医療の現状についての認識を明らかにする。

III. 用語の定義

飛騨圏域：岐阜県が地域医療構想で示す構想区域（二次医療圏）で指定した「高山市、飛騨市、下呂市、白川村」¹²⁾とする。

IV. 研究方法

1. 調査対象

飛騨圏域にある高等学校6校で進路指導の担当歴がある教員を調査対象とした。

2. 調査方法

Microsoft Forms を用いて Web 上で無記名自記式質問紙調査を実施した。調査期間は2024年8月～2024年10月であった。調査項目は、①基本属性（教員歴、出身地）、②（飛騨出身者のみ）飛騨圏域で働くことのメリット、③飛騨圏域の医療や看護の現状に対する認識、④生徒の「地元愛」「地元の医療・福祉への貢献」という意識の向上に働きかけている取組みの実際、⑤未来を担う看護師育成（飛騨圏域へのUターン）における医療・行政・教育機関との連携の必要性の有無とその具体的な連携のあり方、⑥進路指導で大切にしていることの6項目とした。

3. 研究分析

調査で得られたデータより、飛騨圏域における看護職人材の確保に向けた看護・医療職を志向する高校生に対する進路指導の現状や飛騨圏域の医療や看護の現状に対する認識に関する記載内容を、意味のある文節ごとにコード化し、類似したコードをまとめ、カテゴリー化した。

4. 分析結果の厳密性

研究対象者から得たデータについて、複数の研究者間で相互に確認し合いながら、解釈に偏りのないよう、分析の厳密性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮

研究目的、方法、個人情報保護の遵守、研究参加の自由、研究への不参加及び途中辞退により不利益が生じないこと、研究結果の公表について説明文書に記載し、Web 調査への回答をもって同意とした。本研究は岐阜協立大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 EA-2024-003）。

V. 結果

1. 研究対象者の概要

回収数は18、有効回答数は18（有効回答率100%）であった。教員の経験年数では、21年以上が61.1%と最も多く占め、出身地は飛騨圏域が72.2%を占めた（表1）。

表1 研究対象者の教員経験年数と出身

教員経験年数	n (%)	出身	n (%)
0～5年	2 (11.1%)	飛騨圏域	13 (72.2%)
6～10年	0 (0.0%)	飛騨圏域以外	5 (27.8%)
11～15年	3 (16.7%)		
16～20年	2 (11.1%)		
21年以上	11 (61.1%)		

2. 飛騨圏域における看護職人材の確保に向けた看護・医療職を志向する高校生に対する進路指導の現状

調査より、飛騨圏域出身の教員が飛騨圏域で働くことのメリットや飛騨圏域の医療や看護の現状に対する認識、生徒の「地元愛」「地元の医療・福祉への貢献」という意識の向上に働きかけている取組みの実際、未来を担う看護師の養成（飛騨圏域へのUターン就職）において、医療・行政・教育機関との連携の必要性、進路指導で大切にしていることに関するデータを得た。

以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを< >, コードを“ ”で示す。

表2 飛騨圏域出身の教員が飛騨圏域で働くことのメリット

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
地元根ざした暮らし	愛着のある慣れ親しんだ地で働ける	・慣れ親しんだ地で働くことができる ・生まれ育った土地で働くことができる ・愛着が強い地元で働く
	親族の面倒をみたり支援が得られる	・親族らの支援が得られる ・両親の面倒をみる ・実家の両親の様子をすぐに見に行ける ・何かあったときに両親に頼ることができる
	地元の人とのつながりがある	・長年付き合いのある人とのつながりがある ・地元で知っている人が多く助けてもらえる ・人と人とのつながりが深い ・都会と比べて地域住民との関係性が築きやすい
実家圏内で働ける場所	実家から負担なく通勤できる	・地元に戻る ・職場が実家から近く楽である ・実家から通勤できる (3)
郷土貢献	生まれ故郷に貢献できる	・生まれ育った地元で貢献できる
穏やかな暮らし	自然が豊かで時間の流れにゆとりがある	・自然が豊かである ・時間の流れにゆとりがある

※コードの文末にある数字は件数を示す

1) 飛騨圏域出身の教員が飛騨圏域で働くことのメリット

飛騨圏域出身の教員が飛騨圏域で働くことのメリットについては、19のコード、6つのサブカテゴリー、4つのカテゴリーを生成した(表2)。生成したカテゴリーは、【地元で根ざした暮らし】【実家圏内で働ける場所】【郷土貢献】【穏やかな暮らし】であった。

【地元で根ざした暮らし】のサブカテゴリーは、“慣れ親しんだ地で働くことができる”などの<愛着のある慣れ親しんだ地で働ける>、“両親の面倒をみることができる”などの<親族の面倒をみたり支援が得られる>、“長年付き合いのある人とのつながりがある”などの<地元の人とのつながりがある>であった。

【実家圏内で働ける場所】のサブカテゴリーは、“職場が実家から近く楽である”などの<実家から負担なく通勤できる>であった。

【郷土貢献】のサブカテゴリーは、“生まれ育った地元で貢献できる”といった<生まれ故郷に貢献できる>であった。

【穏やかな暮らし】のサブカテゴリーは、“自然が豊かである”“時間の流れにゆとりがある”といった<自然が豊かで時間の流れにゆとりがある>であった。

2) 飛騨圏域の医療や看護の現状に対する認識

飛騨圏域の医療や看護の現状に対する認識については、32のコード、12のサブカテゴリー、5つのカテゴリーを生成した(表3)。生成したカテゴリーは、【人口構造の変化による地域の支え手不足】【将来への医療の質への懸念】【都市部との医療格差】【医療従事者の人材不足】【認識不足】であった。

【人口構造の変化による地域の支え手不足】のサブカテゴリーは、“高齢化が進んでいることで医療を必要とする高齢者が多い”などの<高齢化による医療ニーズの増加>、“若い年齢の人が減っていること”といった<生産人口の減少>であった。

【将来への医療の質への懸念】のサブカテゴリーは、“周囲には現状や将来を懸念する声が多数ある”などの<医療・看護の質への懸念>、“高齢医師は経験豊富で良い一面があるが受診にやや不安を感じることもある”などの<高齢医師への受診の不安>であった。

【都市部との医療格差】のサブカテゴリーは、“平時の医療は充実しているが、高度医療は都市部でないと受けられない”などの<高度医療を都市部で受療する必要性>、“ケガや事故等による緊急時に病院まで遠く、搬送に時間がかかる”などの<地域による医療アクセス格差の深刻さ>、“依然として医療環境としては都市部との差がある”などの<都市部との医療サービスの質の差>であった。

【医療従事者の人材不足】のサブカテゴリーは、“医療従事者に優秀な方がいない”といった<優秀な医療従事者の人材不足>、“看護・医療人材の不足や流出はこれからの飛騨圏域の課題である”などの<医療従事者の人手不足・流出>、“特定の科での医師不足が顕在化している”などの<特定の対象や診療科における人材不足>であった。

【認識不足】のサブカテゴリーは、<今は特に感じていない><分からない>であった。

3) 生徒の「地元愛」「地元の医療・福祉への貢献」という意識の向上に働きかけている取組みの実践

生徒の「地元愛」「地元の医療・福祉への貢献」という意識の向上に働きかけている取組みの実践については、27のコードから10のサブカテゴリー、4つのカテゴリーを生成した(表4)。

生成したカテゴリーは、【地域医療を深め、広げる探究的学び】【地域に根づく進路選択を支える指導】【地域医療の理解促進・体験活動】【取組み不足】であった。

【地域医療を深め、広げる探究的学び】のサブカテゴリーは、“探究的な学習の時間で、飛騨地域におけ

表3 飛騨圏域の医療や看護の現状に対する認識

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
人口構造の変化による地域の支え手不足	高齢化による医療ニーズの増加	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢化が進んでいることで医療を必要とする高齢者が多い ・ 患者の高齢化が進んでいる (3) ・ 高齢化
	生産人口の減少	<ul style="list-style-type: none"> ・ 若い年齢の人が減っていること
将来への医療の質への懸念	医療・看護の質への懸念	<ul style="list-style-type: none"> ・ 周囲には現状や将来を懸念する声が多数ある ・ 医療のレベルが上がっていくのか心配
	高齢医師への受診の不安	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢医師は経験豊富で良い一面があるが受診にやや不安を感じることもある ・ 医療機関で高齢の医師が多いと感じる
都市部との医療格差	高度医療を都市部で受療する必要性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 平時の医療は充実しているが、高度医療は都市部でないと受けられない ・ 高度な医療を受けるために都心の病院に通わなければならない、自分の家族も他県の病院を紹介してもらった
	地域による医療アクセス格差の深刻さ	<ul style="list-style-type: none"> ・ ケガや事故等による緊急時に病院まで遠く、搬送に時間がかかる ・ 住む地区により医療機関へのアクセスが非常に困難である
	都市部との医療サービスの質の差	<ul style="list-style-type: none"> ・ 依然として医療環境としては都市部との差がある ・ 大都市と比べて提供できるサービスの質に差が生まれている
医療従事者の人材不足	優秀な医療従事者の人材不足	<ul style="list-style-type: none"> ・ 医療従事者に優秀な人がいない
	医療従事者の人材不足・流出	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特に介護分野で人手が足りてないと思う ・ 医療従事者の不足 ・ 在校生、卒業生、保護者などから人手不足で大変との話を聞くことが多い ・ 医師の人数が不足している ・ 中核病院ですべての診療科の医師(看護師)が充足しておらず深刻な問題である ・ 看護師だけでなく、医療職者全体が不足している ・ 看護・医療人材の不足や流出はこれからの飛騨圏域の課題である ・ 医師不足が深刻化しているが、看護師はそこまで不足していないと感じる ・ 医療や看護を含め、飛騨圏域の看護人材の育成や経済活動を推進する人材の育成は急務の課題である ・ 非常勤医師が多く、現実的に常勤の医師が不足している
	特定の対象や診療科における人材不足	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特定の科での医師不足が顕在化している ・ 診療科によって医師不足・看護師不足が深刻であることは理解しているつもりである ・ 小児・高齢者医療の不足が目立つように思える
認識不足	今は特に感じていない	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今は何も感じてはいない
	分からない	<ul style="list-style-type: none"> ・ 分からない

※コードの文末にある数字は件数を示す

る医療課題について、現状の認識と他の地域の実践例を踏まえた提言を行う研究をしている”などのく地域の地域医療を軸とした探究活動とキャリア形成>、“1・2年次から「探究飛騨」というプログラムを提供するなかで医師を志望する生徒は大抵、地域医療に関する探究活動を行うが、地域の診療科の様子や現場

表4 生徒の「地元愛」「地域の医療・福祉への貢献」という意識の向上に働きかけている取組みの実態

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
地域医療を 深め、広げる 探究的学び	地元の地域医療を 軸とした探究活動と キャリア形成	<ul style="list-style-type: none"> ・ 探究的な学習の時間で、飛騨地域における医療課題について、現状の認識と他の地域の実践例を踏まえた提言を行う研究をしている ・ 生徒が探究活動としてテーマに医療を取り上げて探究している ・ 飛騨をテーマにした探究活動を行い、医療をテーマにする生徒が多くいる ・ 地元に関するテーマを設定して「探究飛騨」という探究活動を行っている ・ 総合的な探究の時間において、探究飛騨の取組みで毎年、飛騨の医療について探究し、地元就職する目的で医療従事者を目指す生徒が多い ・ 探究活動で、教員が強制せず生徒が自由にテーマを選択するなかで毎年一定数の生徒は医療や福祉に関するテーマに関心をもって発表し、地域の課題に関心をもっていることが分かる ・ 10年前から飛騨に関連した探究活動を行い、テーマを将来の進路と絡めて選択する生徒が多いため、毎年、地域医療や看護、薬剤師の医療関連の探究を行っている ・ 「総合的な探究の時間」で地元の課題を考察する取組みを実施している ・ 授業「探究的な時間」等の中で生徒に考えさせている
	医療関係者を介した 地域医療の探求的 学び	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1・2年次から「探究飛騨」というプログラムを提供するなかで医師を志望する生徒は大抵、地域医療に関する探究活動を行うが、地元の診療科の様子や現場の医師をはじめとする医療従事者へのインタビュー等を通じて地域の医療問題を身近な問題として捉えることができたと感じている ・ 総合的な探求で地域医療を選んだ生徒に対して、市役所より医療担当者を招いて講義をしてもらっている
	探究活動の発表会に おける地域医療・ 福祉の理解と気づき の広がり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 探求活動で、地域の医療や福祉に関するテーマで発表された内容を他の生徒や周囲の大人たちに医療問題について考えるきっかけを提供できていると考えている ・ 探求活動において発表会で参加する他の生徒も地域医療や医療関連の内容を聞くため、それらの知識をもっている生徒は全体的に多いと感じる
地域に根づく 進路選択を 支える指導	地元就職、Uターン 就職を意識した進路 指導・授業	<ul style="list-style-type: none"> ・ 医療・看護系に進学したい生徒は飛騨圏外に進学する必要があるが、地元での就職ができるよう高校生のときから繰り返し話している ・ 地元就職、Uターン就職を意識して進路指導をしている ・ 医療と看護に限らず地元志向を意識して授業しており、特に地元の就職希望者を増やすことは業界問わず大事だと感じている
地域医療の 理解促進・ 体験活動	地域医療に関する 研修会や説明会への 参加促進	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地元が行っているメディカルハイスクールへの参加を推奨している ・ 夏休みにオンライン説明会や研修会を開催し、積極的に参加している生徒が多い
	進路ガイダンスや 地元企業説明会の 開催	<ul style="list-style-type: none"> ・ 就職活動において、地元企業の説明会を開き、飛騨圏域も優秀な企業があることが理解させるような指導をしている ・ 年に数回、進路ガイダンスを実施している ・ 県内の看護師や医師などから進路ガイダンスで実際の話聞く機会を設け、看護希望者の割合が多い
	地元の病院による 出前授業の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地元の病院に協力してもらい、出前授業を実施している ・ 地元の病院に協力してもらい、年1回の出前授業を実施している
	看護体験やボラン ティア活動への参加促 進	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域の医療イベント（看護体験）やボランティア活動への参加を積極的に取り組ませている ・ ふれあい看護体験への参加を促している
取組み不足	特になし	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし
	分からない	<ul style="list-style-type: none"> ・ 分からない

の医師をはじめとする医療従事者へのインタビュー等を通じて地域の医療問題を身近な問題として捉えることができたと感じている”などの<医療関係者を介した地域医療の探求的学び>、“探求活動で、地域の医療や福祉に関するテーマで発表された内容を他の生徒や周囲の大人たちに医療問題について考えるきっかけを提供できていると考えている”などの<探究活動の発表会における地域医療・福祉の理解と気づきの広がり>であった。

【地域に根づく進路選択を支える指導】のサブカテゴリーは、“医療・看護系に進学したい生徒は飛騨圏外に進学する必要があるが、地元での就職ができるよう高校生のときから繰り返し話している”などの<地元就職、Uターン就職を意識した進路指導・授業>であった。

【地域医療の理解促進・体験活動】のサブカテゴリーは、“地元が行っているメディカルハイスクールへの参加を推奨している”などの<地域医療に関する研修会や説明会への参加促進>、“就職活動において、地元企業の説明会を開き、飛騨圏域も優秀な企業があることが理解させるような指導をしている”などの<進路ガイダンスや地元企業説明会の開催>、“地元の病院に協力してもらい、出前授業を実施している”などの<地元の病院による出前授業の実施>、“地域の医療イベント（看護体験）やボランティア活動への参加を積極的に取り組ませている”などの<看護体験やボランティア活動への参加促進>であった。

【取組み不足】のサブカテゴリーは、<特になし><分からない>であった。

4) 未来を担う看護師育成（飛騨圏域へのUターン）における医療・行政・教育機関との連携の必要性和具体的な連携のあり方

未来を担う看護師の育成（飛騨圏域へのUターン）における医療・行政・教育機関との連携の必要性について、感じている人は15名（83.3%）であった（表5）。その具体的な連携のあり方については、31のコードから11のサブカテゴリー、3つのカテゴリーを生成した（表6）。生成したカテゴリーは、【選ばれる職場づくりの総合戦略】【医療への理解を深める活動】【必要な医療人材を適切に確保・配置するための仕組み】であった。

【選ばれる職場づくりの総合戦略】のサブカテゴリーは、“大学との連携で若い世代の医療関係者が飛騨に来てもらえる工夫”などの<魅力を感じられる福利厚生や待遇面の改善>、“働きやすい環境を整えること”などの<職場環境の充実>、“研修機会を増やし、専門看護師への道に進むことができる制度や政策を作ること”などの<キャリアアップ制度の充実>、“3年間は田舎での研修ができるプログラムの構築”といった<地方で研修ができるプログラムの整備>、“返済不要の奨学金の支援”などの<奨学金制度の充実>であった。

【医療への理解を深める活動】のサブカテゴリーは、“医療を身近に感じることができるイベント”などの<今の医療情勢がわかるイベント開催>、“インターンシップや出前授業など実際に医療を見たり体験したり直接、医療従事者の方と接する機会を若年から継続的に行うこと”などの<実際の医療現場を知ることができる取組みの推進>であった。

【必要な医療人材を適切に確保・配置するための仕組み】のサブカテゴリーは、“就業場所の案内”などの<就業先の斡旋>、“医療を学んでいる地元出身者との情報共有”などの<医療を志す人に関する情報共

表5 看護師の育成における医療・行政・教育機関との連携の必要性

連携の必要性の有無	n (%)
連携の必要性を感じている	15 (83.3%)
連携の必要性を感じていない	3 (16.7%)

表6 看護師の育成において医療・行政・教育機関との連携で必要とすること

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
選ばれる職場づくりの総合戦略	魅力を感じられる福利厚生や待遇面の改善	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学との連携で若い世代の医療関係者が飛驒に来てもらえる工夫 ・ 他県に負けない魅力作り ・ 地元を魅力的な場所（職場）にするための仕組み作り ・ 魅力ある職場作り ・ 飛驒にUターンして帰ってこられる（帰ってきたいと思える）職場があること ・ 待遇の改善を図ること ・ 都市部と地方との環境や条件（給料等）の違いを精査のうえ、職場環境や福利厚生、給与の改善
	職場環境の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・ 働きやすい環境を整えること ・ 医療設備、施設設備を整えること ・ 行政が主体となり人材確保や働きやすい・住みやすい環境を整備することが最優先だと考える ・ 行政の力を借りて給与面で都市と差が生じる場合は若年者が入りたいと考える休日への工夫やフレキシブルな時間関係、明るい職員食堂や雰囲気の良い休憩室など独自の工夫
	キャリアアップ制度の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研修機会を増やし、専門看護師への道に進むことができる制度や政策を作ること ・ 専門的なことが学べる職場や制度を作ること
	地方で研修ができるプログラムの整備	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3年間は田舎での研修ができるプログラムの構築
	奨学金制度の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・ 返済不要の奨学金の支援 ・ 奨学金制度の充実 ・ Uターン就職者への奨学金や奨励金の支援 ・ 奨学金制度の拡充 ・ 奨学金だけでは地元定着は限定的である
医療への理解を深める活動	今の医療情勢がわかるイベント開催	<ul style="list-style-type: none"> ・ 医療を身近に感じることができるイベント ・ 今の医療が深刻であることが理解できる講演会の開催
	実際の医療現場を知ることができる取組みの推進	<ul style="list-style-type: none"> ・ インターンシップや出前授業など実際に医療を見たり体験したり直接、医療従事者の方と接する機会を若年から継続的に行うこと ・ 積極的なインターンシップの受入れ ・ 生徒が早い段階で医療現場のことを知ることができるように医療従事者へのインタビューや医療機関の見学 ・ 教育機関は進路ガイダンス、オンラインでの会話や研修会、経験者からの話の取組みを続ける
必要な医療人材を適切に確保・配置するための仕組み	就職先の斡旋	<ul style="list-style-type: none"> ・ 就職先の斡旋 ・ 就業場所の案内
	医療を志す人に関する情報共有	<ul style="list-style-type: none"> ・ 医療を学んでいる地元出身者との情報共有 ・ 医療系進学者の情報共有
	各機関のニーズやできることの情報共有	<ul style="list-style-type: none"> ・ 互いに何ができて何を求めているか共有すること
	地域人材の持続的確保	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域に戻ってくる人材の確保

有>、“互いに何ができて何を求めているか共有すること”といった各機関のニーズやできることの情報共有>、“地域に戻ってくる人材の確保”といった地域人材の持続的確保>であった。

表7 進路指導で大切にしていること

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
生徒主体の進路形成支援	生徒の考えや希望を尊重したサポート	<ul style="list-style-type: none"> 生徒のこれからの進路に対する考えを尊重する 生徒のこれからの進路に関する思いをしっかりと聞く できる限り生徒の希望が実現できるサポートをする 生徒が憧れる進路に進むことができるようにサポートする 生徒の興味・関心に寄り添い、10年後の自分の将来を考える視点を大切にしている
	生徒が将来の進路を考え行動できる指導	<ul style="list-style-type: none"> 生徒ができる限り後悔させない選択を考えさせる 時間をかけて生徒に丁寧に考えさせる 生徒自身のキャリアを十分に考えさせ、行動に移すように指導している 生徒が主体的に実行するように仕向ける指導を心がけている
	生徒と保護者が進路に納得できる面談	<ul style="list-style-type: none"> 生徒と保護者が納得できる進路を選択できるようにする 保護者の思いも踏まえて面談している
	生徒が希望する進路と生徒自身や家庭の状況の適正を大切に指導	<ul style="list-style-type: none"> 本人の希望と適正を大切にしている 生徒が希望する進路に対して学力が大きく及ばなかったり適正が大きくかけ離れていたりするときは軌道修正することも必要と考える 生徒のこれからの進路への意志と家庭の今の事情を考慮する 生徒や家族の思う将来像や客観的に見た適正(性格、学力など)、進学して学びたいことなどについて面談等を通して十分に理解して情報をしっかりと提示する
	生徒自身が将来像を持てる指導	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が自分の将来像を具体的に語るができるまで質問を投げかけ続ける 自己分析と上級学校での学び、卒業後の職業観を具体的にもてるように指導している
進路支援の質を高めるための情報基盤づくり	生徒が希望する進路につながるための情報提供	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が希望する進路につながるための選択肢を多く与える 生徒が憧れる進路に関する多くの情報を提供する 生徒が進路を選択しやすいようなアドバイスをする 生徒の希望に添って必要なことを授業や学校生活で伝える 生徒が幅広い視野をもち納得できる進路選択ができるように導く
	生徒の特性を踏まえた指導ができるための進学・就職先の下調べの徹底	<ul style="list-style-type: none"> 進学・就職後にできる限り後悔させないように進学・就職先の詳しい研究をしている 生徒が将来したいことや興味・性格等を含めて大学の特徴や卒業後の進路を徹底的に調べる
経験を力に地域へつなぐ学び	進路実現に向けて経験を大切に環境づくり	<ul style="list-style-type: none"> 生徒にさまざまな経験を積ませて進路実現に向けて力強く進める環境を作る
	地元へ地域貢献できる人材になることへの要望	<ul style="list-style-type: none"> 地元の良さを見直し、将来、地元へ帰って地域貢献できる人材になるようお願いしている

5) 進路指導で大切にしていること

進路指導で大切にしていることについては、26のコード、9つのサブカテゴリー、3つのカテゴリーを生成した(表7)。生成したカテゴリーは、【生徒主体の進路形成支援】【進路支援の質を高めるための情報基盤づくり】【経験を力に地域へつなぐ学び】であった。

【生徒主体の進路形成支援】のサブカテゴリーは、“生徒のこれからの進路に対する考えを尊重する”な

どの〈生徒の考えや希望を尊重したサポート〉、“生徒ができる限り後悔させない選択を考えさせる”などの〈生徒が将来の進路を考え行動できる指導〉、“生徒と保護者が納得できる進路を選択できるようにする”などの〈生徒と保護者が進路に納得できる面談〉、“生徒が希望する進路に対して学力が大きく及ばなかったり適正が大きくかけ離れていたりするときは軌道修正することも必要と考える”などの〈生徒が希望する進路と生徒自身や家庭の状況の適正を大切にしたい指導〉、“生徒が自分の将来像を具体的に語るができるまで質問を投げかけ続ける”などの〈生徒自身が将来像を持てる指導〉であった。

【進路支援の質を高めるための情報基盤づくり】のサブカテゴリーは、“生徒が希望する進路につながるための選択肢を多く与える”などの〈生徒が希望する進路につながるための情報提供〉、“進学・就職後にできる限り後悔させないように進学・就職先の詳しい研究をしている”などの〈生徒の特性を踏まえた指導ができるための進学・就職先の下調べの徹底〉であった。

【経験を力に地域へつなぐ学び】のサブカテゴリーは、“生徒にさまざまな経験を積ませて進路実現に向けて力強く進める環境を作る”といった〈進路実現に向けて経験を大切にしたい環境づくり〉、“地元の良さを見直し、将来、地元に戻って地域貢献できる人材になるようお願いしている”といった〈地元で地域貢献できる人材になることへの要望〉であった。

VI. 考察

飛騨圏域の高等学校においてこれまで進路指導を担当した対象から得られた結果をもとに、飛騨圏域の看護・医療の現状についての認識や看護職を志向する高校生への地元愛を育む進路指導の実態を検討した。飛騨圏域における看護職人材を確保できるための方策を考察し、大学に求められる役割について検討したい。

1. 飛騨圏域の医療や看護の現状に関する認識

飛騨圏域の医療や看護の現状に対する認識の一つに、対象の多くが【人口構造の変化による地域の支え手不足】を挙げた。2025年における高山市の出生数は、この40年間で3分の1まで減少する一方で死亡数は倍増し、65歳以上の人口割合は33.4%¹³⁾、さらに飛騨市では40.5%を占め¹⁴⁾、全国の高齢化率29.4%¹⁵⁾をはるかに上回る状況に危機感を募らせている。そのうえで、高山市は2020年までの30年間で生産年齢人口(15~64歳)が約3割減少のうえ¹⁶⁾、10~20代の市民が職業上、学業上を理由に転出超過が多く¹⁷⁾、“看護師だけでなく、医療職者全体が不足している”などの〈医療従事者の人材不足・流出〉を現状の課題として捉えていた。特に2003年から20年間における高山市の転出理由の大半は「職業上」を占め、とりわけ20代女性が同理由での転出が顕著で¹⁸⁾、その一部に看護職も含まれると予測できる。但し、高山市は2021年度に「高山市移住戦略」¹⁹⁾(プロモーションの実施、相談体制の充実、住まい・就労支援、暮らしの支援)を定めて取り組み、岐阜県内トップクラスの移住者数水準に達したが、依然として転出超過の状況にあり、“医療従事者の不足”が懸念されている。

飛騨圏域の診療科別人口10万対医療施設従事医師数(2020年)は、概ねの診療科が全国を下回る状況から²⁰⁾〈特定の対象や診療科における人材不足〉にあり、これが【都市部との医療格差】をもたらしていた。つまりは、広大な土地にある飛騨圏域における“住む地区により医療機関へのアクセスが非常に困難である”問題や“ケガや事故等による緊急時に病院まで遠く、搬送に時間がかかる”といった〈地域による医療アクセス格差の深刻さ〉を抱えていた。また、飛騨圏域の人口密度は全国平均の約1/10にあたる33.2人/km²であり²¹⁾、住民が広く点在する地理的条件にあることから“受診控え”や“受診遅れ”につながり、

加えて積雪の多い地域であることで医療機関への移動時間がかかる問題を抱える。

飛騨圏域は、人口減少と医療の担い手不足が顕著であり、高度医療技術への設備投資など医療需要に対応するための非効率的な医療経営を強いられるため²²⁾、対象は<医療・看護の質への懸念>をもち都市部との医療サービスの質の差>を感じていた。その状況下で、高山市は地域の医療体制を守るために、市内の総合病院と国立大学の高度医療機関をつなぐ「医療情報共有システム」「遠隔手術支援システム」の導入、高度医療を市内で完結させる医療DX（がん医療対策ネットワーク事業）の導入²³⁾、久々野・朝日・高根の各地域にある3診療所が機能的に一体化したうえで、人口減少地域でも医療を維持するモデルを構築し、地域に即したきめ細かく継続性のある安定した医療の提供の取組み²⁴⁾など、数多くの先駆的な取組みがある。本調査ではこれらの先駆的な取組みに関する認識を認めなかったことから、今後の課題として、教員が飛騨圏域の先駆的な医療の取組みの実態を知り、飛騨圏域の医療等の強みや魅力を高校生に伝えることが、将来的に地元で定着する看護職者が生まれる可能性があると考えられる。

2. 生徒の「地元愛」「地元の医療・福祉への貢献」という意識の向上に働きかける取組みの実際

泉澤ら²⁵⁾は、過疎地域における看護師人員確保をすすめていくうえで、奨学金は将来の定着には結び付きにくく、奨学金を活用しながら地元愛を育み看護職としての誇りを持つことが、地元を離れた者のリターン再就職につながると示唆している。その点から、高校生から「地元愛」を芽生えさせ、地元の看護・医療に関心をもち、将来、看護師等になって地元の医療・福祉施設で貢献したいと思える支援が求められている。本調査の対象約7割は地元の飛騨圏域の出身であったが、対象らは飛騨圏域で働くことのメリットとして<愛着のある慣れ親しんだ地で働ける><地元の人とのつながりがある>や<生まれ故郷に貢献できる>といった【郷土貢献】を挙げ、その点から飛騨圏域の高等学校教員は地元愛が強く、生徒の地元愛を芽生えさせるうえで前向きな影響を及ぼすことが考えられる。

生徒の「地元愛」「地元の医療・福祉への貢献」という意識の向上に働きかける実際の取組みとして、対象の多くが「総合的な探究の時間」を利用して飛騨の医療や福祉等を探究する【地域医療を深め、広げる探究的学び】を挙げていた。文部科学省は、この「総合的な探究の時間」の目標を「探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成すること」²⁶⁾としている。生徒は“地元の診療科の様子や現場の医師をはじめとする医療従事者へのインタビュー等を通じて、地域の医療問題を身近な問題として捉えることができた”“市役所より医療担当者を招いて講義をしてもらっている”ことによる<医療関係者を介した地域医療の探求的な学び>をすることで、総合的な探究の時間の核心でもある地元の実社会との接続・価値創造・自己の生き方の探求に直結する非常に強力な学習効果を生み出すことができるといえる。また、「総合的な探究の時間」以外にも対象は飛騨圏域で推し進めているメディカルハイスクールをはじめとする<地域医療に関する研修会や説明会への参加促進>、地元の企業や医療従事者を招いて実施する<進路ガイダンスや地元企業説明会の開催>、<地元の病院による出前授業の実施>、<看護体験やボランティア活動への参加促進>といった【地域医療の理解促進・体験活動】を推進していたことが分かった。これらと同様な取組みをした矢田ら²⁷⁾は、地元の大学にて高大連携セミナーとして、地域医療に関する講演、医療現場の体験学習、小グループによる医療討論を開催したところ、地方での医療の現実を知って地元で働きたいと思う人が約20%増加したとの報告がある。加えて、地元で同様のことを実施することで医療を身近に感じ、地元で働く使命感を参加者をもつようになったことは、長期的に地域医療を支え手いこううで極めて重要であることを示唆しており、これは飛騨圏域で実際に行われている内容にも共通する。これらの取組みにより高校生のときから地元愛を育みながら飛騨圏域の医療施設等で従事する意欲を高め

ることで、将来的にはUターンが期待できる。そのうえで、日頃から“地元での就職ができるよう高校生のときから繰り返し話す”〈地元就職、Uターン就職を意識した進路指導・授業〉をすることで生徒はさらに地元を意識した進路選択や地元の医療機関等への従事につながると考える。飛騨圏域の看護職者が少ない現状にありながらも、“飛騨をテーマにした探究活動を行い、医療をテーマにする生徒が多くいる”現状より、将来的には、この医療や看護に興味がある生徒を地元で就職したいと思えるような土台作りが重要になる。そのうえで、看護系大学の教員としても高等学校に出向き、看護や医療の実際や魅力を高校生に伝えていくことが求められると考える。

3. 看護師の育成において医療・行政・教育機関との連携が必要とすること

高等学校でのキャリア支援は、学校内部の努力のみでは構造的に限界があり、看護師の人材を高校生の早期から確保するために、医療・行政・教育機関との連携は必須である。実際に「連携の必要性を感じている」対象は83.3%を占めた。そのうえで、高等学校の教員として、これらの機関と連携するうえで必要なこととして、〈魅力を感じられる福利厚生や待遇面の改善〉〈職場環境の充実〉〈奨学金制度の充実〉などの【選ばれる職場づくりの総合戦略】が最も多く挙げられた。特に給与・待遇面や奨学金制度の充実が多かったが、地方の中小病院は都市部の病院よりも給与が低く²⁸⁾、これは都市部の看護師確保競争が激しいことや需給バランス等の理由により都市部と同等の給与等に持ち上げることは容易ではない。しかし、飛騨市では、医療・介護等専門職員U・Iターン就職奨励金事業²⁹⁾や医療・福祉専門職員就職準備貸付金貸与事業³⁰⁾などの補助制度があり、待遇面としての魅力を打ち出している。そのうえで、高等学校と行政および医療機関と連携して、これらの事業や制度を共有し、生徒に情報提供することが大切である。また、原ら³¹⁾の看護系大学4年生を対象とした調査結果によると、就職先の病院を選択する際には、給与・ボーナスよりも継続教育を重視している結果であった。高校生を対象とした同様の先行研究は見当たらなかったが、看護師を目指す高校生も同様の傾向にあると推測できる。このことから、将来的に飛騨圏域の高校生が地元の医療機関等に就職・定着するためには、まず新人教育や継続教育の質の向上が重要である。そのためには、病院看護部と看護系大学等の教育機関との連携により教育の質の向上を図り、魅力ある教育を提供できるように整備することが必要である。加えて、給与等の待遇と同等に病院選択で重視する一つに「専門看護師や認定看護師が働いている」が挙げられた。これは医療が高度化、専門化するなかで質の高い看護の提供を目指したいところにあるといえる。そのうえで、まずはロールモデルとなるスペシャリストと一緒に看護に従事することで看護の専門性を高め、いずれは“研修機会を増やし、専門看護師（認定看護師）への道に進むことができる制度や政策を作ること”、つまりは〈キャリアアップ制度の充実〉を図ることで地元の医療機関への就職につなげることができると考える。この点については、医療機関と行政の連携が求められる。

次に〈今の医療情勢がわかるイベント開催〉〈実際の医療現場を知ることができる取組みの推進〉といった【医療への理解を深める活動】が必要なこととして挙げられた。実際には、医療機関や行政と連携して“積極的なインターンシップの受入れ”について、インターンシップに参加することで、職業に対する感性や意識の向上、自分の夢を実現するために働く意義を理解すること、職業に関する能力の自己評価が向上するなどの職業観の形成につながることが示唆されているように³²⁾、職業観が未熟とされる高校生が地元の医療機関に出向くことで、現場の雰囲気や直に感じ、特に医療従事者が患者と向き合う場面を実際に見ることで地元の医療機関への就労意欲が増すことが考えられる。

4. 生徒への進路指導で大切にしていること

高校生の時期は、自分らしさを確立しながら学問や職業等を選択し、自分の本分とする社会的な自己の在り方を見出し、社会的役割の決定を行うアイデンティティ(同一性)の確立をする大事な時期である³³⁾。その自己定義を見出すために人は、親や教師などの重要他者の影響を受けて構築するが³⁴⁾、進路選択で揺らいでいる生徒への進路指導担当教員の関わりは非常に重要になる。そのうえで、生徒への進路指導で大切にしていることとして、多くの対象が【生徒主体の進路形成支援】をすることであった。つまりは、生徒が将来設計で揺らいでいるなかで“生徒のこれからの進路に関する思いをしっかりと聞く”ことや“生徒のこれからの進路に対する考えを尊重する”ことで今後の進路についてどのように考え悩んでいるかをく生徒の考えや希望を尊重したサポート>している点が特徴的であった。しかし、高校生のときに将来希望する職業を考えていない人やまだ決めていない人は44.6%を占めていることから³⁵⁾、生徒が適正に欠く進路選択をする可能性がある。そのため、<生徒が希望する進路と生徒自身や家庭の状況の適正を大切にした指導>をすることで、生徒の考えを尊重しつつもこれまでの進路指導の経験やノウハウを駆使して生徒一人ひとりが適正な進路選択を図れるように配慮していた。しかしながら、坪見ら³⁶⁾の高校教員を対象とした調査によると、看護系大学への進路指導で困難と感じていた教員は55.0%を占めた。その理由として、大学と専門学校の違い、進学後の様子が分からない、どのような生徒が適しているか分からないが挙げられ、加えて看護系大学に進学した生徒の適応状態を把握できないなど指導に苦慮していた。そのため、教員は事前に<生徒の特性を踏まえた指導ができるための進学・就職先の下調べの徹底>をすることで生徒が納得できる進路選択が図れるための土台を築き<生徒が希望する進路につながるための情報提供>をし、“生徒が自分の将来像を具体的に語るができるまで質問を投げかけ続ける”ことを可能にしていた。この一連により明確でなかった将来像が少しずつ作り出すことができている。加えて“生徒と保護者が納得できる進路を選択できる”ようになり、“生徒ができる限り後悔させない選択を考えさせる”ことが可能になると考える。しかしながら、進路指導主事を対象とした調査によると、9割以上の者が進路指導が難しいと回答しており³⁷⁾、今後、看護系養成校の情報を十分にもたない進路指導担当教員と看護系大学の教職員が連携し、看護系大学での教育や生活等の実態に関する情報共有を図ることで、将来的には看護師の人材確保につながると考える。

VII. 結論

1. 飛騨圏域の高等学校に従事する教員は、生徒に総合的な探究の時間などを利用して地元の看護・医療の課題を考察する取組みを行い、さらには地域の医療機関や行政等と連携を図りながら、地域医療に関する研修会、進路ガイダンス、看護体験等の参加を促し、地域医療の理解促進を図っていた。
2. 高校生から地元の看護・医療の状況に関心を持ち、魅力を知ることによって地元愛が芽生え、将来Uターンすることで看護・医療職の人材確保につながる。飛騨圏域では少子高齢化や看護・医療職の人材不足、給与等の待遇の課題等がある一方で先駆的な実践も行われており、教員はこの地元の強みや現状を知り、生徒に地元の魅力を伝え続けることが重要である。
3. 看護職になる人材は継続教育の充実さを就職先に求めており、看護系大学を含む教育機関は医療機関と連携して魅力のある質の高い教育を提供できる取組みが求められる。

VIII. 謝辞

本研究を実施するにあたり多大なご協力を賜りました飛騨高山大学連携センターの担当者様をはじめ、調査にご協力を頂きました飛騨圏域の進路指導担当教員の皆様に心より感謝申し上げます。また、本調査にご指導・ご協力を賜りました岐阜協立大学看護学部の小野悟准教授にもお礼申し上げます。本調査は、令和6年度岐阜県私立大学地方創生推進事業「私らしく生きられるまち飛騨」の未来を担う看護師育成事業の助成を受けた研究の一部である。本研究の一部は、第51回日本看護研究学会学術集会(石川県金沢市)で発表した。

IX. 利益相反

本研究に開示すべき利益相反はない。

参考文献・引用文献

1. 国立社会保障・人口問題研究所 (2023) : 日本の将来推計人口 令和5年推計 人口問題研究資料第347号, p3, https://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2023/pp2023_ReportALLc.pdf (閲覧 2026.2.3)
2. 前掲1), p4.
3. 厚生労働省 (2022) : 令和4年版 厚生労働白書—社会保障を支える人材の確保— [概要], p1, <https://www.mhlw.go.jp/content/000988388.pdf> (閲覧 2026.2.3)
4. 東京アカデミー : 第115回看護師国家試験について, <https://www.tokyo-ac.jp/nurse/exam-info/about/> (閲覧 2026.2.15)
5. 岐阜県 (2025) : 飛騨圏域推進区域対応方針 (案), p2, <https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/432662.pdf> (閲覧 2026.2.3)
6. 飛騨市 : 広報ひだ 2025年8月版 飛騨地域の医療課題へ飛騨地域3市1村・医療による協議会設立へ <https://www.city.hida.gifu.jp/site/koho/2025-08-19-2.html> (閲覧 2026.2.3)
7. リクルートワークス研究所 (2025) : 地方における働き手不足への挑戦 働き手不足と正面から向き合う飛騨市の挑戦—岐阜県飛騨市長・都竹淳也氏, <https://www.works-i.com/research/project/turningpoint/locality/detail013.html> (閲覧 2026.2.3)
8. 高山市 (2025) : 地域の医療体制を守るために 飛騨メディカルハイスクールについて, <https://www.city.takayama.lg.jp/kurashi/1000016/1000092/1019023.html> (閲覧 2026.2.3)
9. 高山市 (2024) : 高校生まちづくりアンケート調査 報告書 令和6年3月, https://www.city.takayama.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/006/854/r5sougousenryakuhoukokusyo.pdf (閲覧 2026.2.3)
10. ベネッセ教育総合研究所 (2015) : 高校生活と進路に関する調査, https://benesse.jp/berd/up_images/research/03_Kokoseikatsu_digest_Web_P08_15.pdf (閲覧 2026.2.15)
11. 松原薫他 (2024) : 飛騨高山で働くことに対する看護大学生への意識調査～高山市の企画による福祉・医療研修に参加した体験から～, 地域創生, 43, pp1-15.
12. 岐阜県 (2016) : 岐阜県地域医療構想, <https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/206709.pdf>

(閲覧 2026. 1. 30)

13. 岐阜県統計課 (2025) : 統計からみた高山市の現状, p3, <https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/466902.pdf> (閲覧 2026. 2. 4)
14. 飛騨市 (2025) : 各町別人口・高齢化率, <https://www.city.hida.gifu.jp/soshiki/13/53240.html> (閲覧 2026. 2. 4)
15. 総務省統計局 (2025) : 統計トピックス No.146 統計からみた我が国の高齢者ー「敬老の日」にちなんでー, <https://www.stat.go.jp/data/topics/pdf/topics146.pdf> (閲覧 2026. 2. 4)
16. 前掲13), p3.
17. 前掲13), p8.
18. 高山市 (2025) : 高山市移住定住戦略, p20, https://www.city.takayama.lg.jp/_res/projects/default_project/_page/_001/015/519/ijuteijusenryaku_r7.3.pdf (閲覧 2026. 2. 19)
19. 岐阜県健康福祉部 (2022) : 岐阜県における地域医療構想の進捗について, <https://www.mhlw.go.jp/content/10800000/000884615.pdf> (閲覧 2026. 2. 16)
20. 岐阜県 (2024) : 岐阜県医師確保計画【令和6年度～令和8年度】について 第2章: 医師全体の医師確保計画, p10, <https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/392659.pdf> (閲覧 2026年2月20日)
21. 地域医療情報システム_岐阜県飛騨医療圏 : https://jmap.jp/cities/detail/medical_area/2105 (閲覧 2026. 2. 19)
22. 前掲5) p2.
23. 高山市 (2025) : 地域の医療体制を守るために, <https://www.city.takayama.lg.jp/kurashi/1000016/1000092/1019023.html> (閲覧 2026. 2. 4)
24. 阪哲彰他 (2024) : 南高山地域センターのこれまでとこれから～センター建設に際し、10年を振り返って～, 第17回へき地・地域医療学会, https://jadecom-hekichi.com/wp2024/wp-content/themes/hekichi2024/assets/exhibition/poster/img/poster_A6.pdf
25. 泉澤真紀他 (2018) : 過疎地域に新卒で就業する看護師の現状と課題, 日本看護研究学会雑誌, 41 (3), 409.
26. 文部科学省 (2023) : 今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開未来社会を切り拓く確かな資質・能力の育成に向けた探究の充実とカリキュラム・マネジメントの実現 高等学校編, p1, https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/20230531-mxt_kyouiku_soutantebiki03_2.pdf (閲覧 2026. 2. 20)
27. 矢田一宏他 (2011) : 高大連携「ふるさと医療人材育成事業: 地域医療を理解するセミナー」の経験とその評価, 医学教育, 42(4), 233-238.
28. 公益社団法人日本看護協会 (2025) : 2024年度看護職員の賃金に関する実態調査報告書, https://www.nurse.or.jp/nursing/assets/kangochingin_report_2024.pdf (閲覧 2026. 2. 19)
29. 飛騨市: 医療・介護等専門職員U・Iターン就職奨励金事業, <https://www.city.hida.gifu.jp/uploaded/attachment/29088.pdf> (2026. 2. 19 閲覧)
30. 飛騨市: 医療・福祉専門職員就職準備貸付金貸与事業, <https://www.city.hida.gifu.jp/uploaded/attachment/29089.pdf> (2026. 2. 19 閲覧)
31. 原玲子他 (2011) : 看護師として病院に就職することを決定した看護学生のキャリア志向と職場選択に関する研究, 宮城大学看護学部紀要, 14(1), 69-79.
32. 今井由美他 (2007) : 高校生の職業観形成におけるインターンシップの効果, 日本感性工学会研究論文集, 7(1), 137-144.
33. 小此木啓吾他 (1985) : 精神分析セミナーV 発達とライフサイクルの観点, 岩崎学術出版社, 212.

34. 溝上慎一 (2020) : 地方在住の高校生のアイデンティティホライズンー心理社会的影響を考慮したアイデンティティ研究ー. 青年心理学研究, 32, 1-15.
35. 国立青少年教育振興機構 (2023) : 高校生の進路と職業意識に関する調査報告書ー日本・米国・中国・韓国の比較ー, 15, <https://www.niye.go.jp/pdf/houkokusho20230622.pdf>. (閲覧 2026. 2. 19)
36. 坪見利香他 (2019) : 看護系大学への進路選択および修学に関する調査(1)ー高校生および高校教員のもつイメージ, 日本教育心理学会第61回総会発表論文集, 540.
37. 株式会社リクルート (2011) : 「2010 年高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」報告書, p4, https://souken.shingakunet.com/research/.assets/2010_shinro_report.pdf (閲覧 2026. 2. 19)